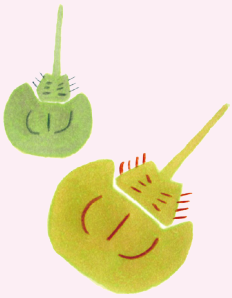
地域を元気にするまちづくり作戦帳

～地域の課題解決をめざすためのヒント集～



第 2 号（全3号）

このパンフレットでは、3回にわたって
「まちづくり協議会」や「ぼっけーまち会議（若者会議）」による
地域の課題解決の方法や具体的な取り組み内容を紹介します。

笠岡市協働のまちづくり課

みんなで考えよう！地域の課題

～まちづくり協議会の取り組み紹介～

今、各まちづくり協議会では、多くの組織・団体と協力を図りながら、地域の課題について真剣に考え、その解決に向けて取り組んでいます。

このページでは、各まちづくり協議会がこれまでに行ってきた「地域の課題発見」の活動について、工夫して取り組んでいる事例の一部を紹介します。

まずは知ることから！

取り組み事例 1

住民アンケートの実施

アンケートの実施は、普段の役員会などの参加者以外の人たちからアイデアをもらうために有効な方法の一つです。これまでに多くのまちづくり協議会で取り組まれています。アンケートの質問内容は、一律のものではなく、その地域の特徴を出した内容になっています。

まちづくり協議会にとっては、アンケートを実施することで、地域の要望を的確に把握でき、事業実施に役立てることができます。

また、地域の住民にとっても、アンケートへの回答をきっかけに、地域の現状だけではなく、課題や解決方法を考える機会につながります。

アンケートの実施は、まちづくりの意識を地域全体で高めることにつながるのです。

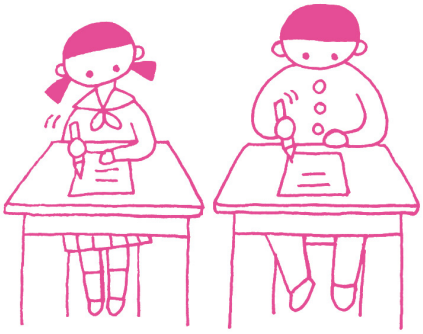
多様なひらめきを生む場！

取り組み事例 2

住民参加型ワークショップの開催

ワークショップとは、端的に言うと「体験型講座」です。講座と言っても、話を聞くだけではありません。参加者がお互いに話し合いながら、共にアイデアを創り上げていく場でもあります。住民参加型のワークショップは、地域の皆さんがまちづくりに参加できる良い機会です。

また、普段とは異なるメンバーが顔を合わせるため、いつもの会合では出なかったアイデアも



アンケート結果を反映事業を実

と」で最も多かった項目について地域でみんなで検討を重ねた結果、昨年度から事業実施ができました。

配布・回収方法にひと工夫

配布・回収に力を入れようと、戸別訪問を実施。手間はかかりましたが、多くの方の協力をいただいたおかげで、高い回収率を実現しました。自由回答欄（要望事項が中心）から事業実施につながったものもあります。

中学生にもアンケート

「将来の地域を担う子どもたちの想いを聞きたい」ということで、中学校の協力を得て地区内の中学生300人にアンケートを実施したまちづくり協議会もあります。

子どもならではの純粋な意見だけでなく、独創的なアイデアやこれまであまり気づかなかった視点もありました。今後のまちづくりに活かされる予定です。

アンケートの依頼がきたら、ぜひご協力を！

アンケートへの協力も住む地域をより良くしていくために、手軽にできるまちづくりの一つ。今後、もし皆さんのもとに協議会からアンケートの依頼があったら、ぜひご協力をお願いします。

※ただし、アンケートをかたり、個人情報を不正に取得しようとする悪質業者にはくれぐれもご注意ください。

取り組み事例 3

出張会議の開催

こちらから伺います！

まちづくり協議会の会議場所まで遠い…特に山間部など協議会のエリアが広く、高齢者が多い地域では「拠点施設に行けないから参加できない」という方も多いようです。そうした状況を見て、小字（集落）単位で訪問し、課題発見のための意見交換会を開催したまちづくり協議会もあります。

また、社会福祉協議会支部や婦人会など、地区内の各種団体を訪問し、同様の会を開催したまちづくり協議会もあります。

飛びだすかもしれません。地域の課題発見に適した方法のひとつです。

地域の課題について話し合うときは、可能な限り、様々な立場の人に参加してもらい、幅広く意見を取り入れていきましょう。最終的な合意が得られやすくなり、その後の課題解決を行う際に協力も得られやすくなります。

次のページからは
課題解決の
取り組みを紹介！
Go!!

数年後を考え
集落で取り組み始めた活動

地域を元気にする 1 まちづくり作戦

買い物便@金浦（かなうら）

「今は」車の運転できるが―

待ち合わせ場所では賑やかな笑い声が。「買い物便」のメンバーが迎えてくれた。「買い物便」とは、月2回民間のジャンボタクシーを手配し、相乗りで大きな商店へ出かける活動だ。金浦地区にはコンビニ等はあるが、大きな商店に行くには何らかの交通手段は欠かせない。5年前に発足した「袖解（そでとき）さくら会」という有志のサロングループが主体となり、昨年秋に金浦地区まちづくり自治協議会の事業として始めた。

現在13人ほどいるメンバーの大半が高齢者だが、利用者の中には車の運転免許証を持つ人もいる。サロンの代表を務める笠原元子さんもその一人だ。だが、笠原さんは「今は皆、車を運転できるが、何年か先はそうはいかないかもしれない。その時に備え、今から仕組みを作りたかった」と言う。この考えにメンバーをはじめ、集落の住民も呼応。これまでに、集落約30世帯中およそ半数の世帯が利用した。

事業成功の秘訣

10人乗りのジャンボタクシーがほぼいつも満員。乗客が多いほど一人あたりの利用者負担が軽く済む。乗客が定員に1、2人足りない時は「一緒にちょっと出かけない？」と近所に声を掛ける。家から出かけるのが難しくなった人がいれば買い物をまとめて引き受けたりもする。メンバーは「とにかく楽しい」と口を揃えるが、その裏に集落全体で継続的に事業を支えようとする努力が光る。「前からサロンで顔なじみになっていたのも大きい。周りに声を掛けやすい地域の雰囲気づくりも大事」とアドバイスをいただいた。

高齢者の暮らしを
見守るお弁当

地域を元気にする 2 まちづくり作戦

配食サービス@白石島（しらいしじま）

地域の危機を地域の力で解決

白石島に住む高齢者の生活は、さまざまなサービスによって支えられている。しかし、昨年ある業者の弁当配達事業の終了が決まり、高齢者の生活支援が課題となった。そこで、地域の力で解決しようと白石・島づくり委員会が「配食サービス」を立ち上げ、住民でアイデアを出し合った。

弁当の発注は、島内での調理引き受け先がなかったため、島外へ。利用者の負担を極力軽くできるよう、島内事業者の協力を得て、弁当を島まで運ぶことにした。配達日も、毎週火・木・土曜日にある島のデイサービスを補うよう、毎週月・水・金曜日にした。弁当を各戸へ届けるのは、笑顔が素敵な原田潔美さんだ。現在は、10軒ほどの高齢者宅をまわっている。

高齢者の見守りも兼ねた活動に

原田さんは弁当を届ける際、利用者と必ず世間話をする。「最近腰の調子はどう？」「弁当全部食べた？」利用者の体調はさまざまだが、表情はみな明るい。「いつも楽しみにしている。生活の一部分」と、ある利用者は話す。原田さんが会話の中で、利用者の体調や環境の変化に気づいたときは、必要に応じて社会福祉協議会などの関係機関へ相談をすることもある。また、訪ねても返事がない場合は、必ず後で声かけをするようにしている。

弁当の配達は、単に食事を運ぶだけでなく、高齢者を地域で見守るシステムの一端になっていると、会長の山川十良さんや事務局員の天野亮さんは語る。事業を継続的に行うため、今なお方法を模索中だ。

地域と、地域活動に参加する人たちを共に思いやる気持ち

地域を元気にする 3 まちづくり作戦

草刈り支援隊＠大井（おおい）

苦労した仕組みづくり

雑草が生い茂る田んぼで、威勢よく草刈りをする男性たち。大井まちづくり協議会「草刈り支援隊」のメンバーだ。現在の隊員数は約30人で、小平井・東大戸・西大戸の3地区からバランスよく構成されている。発足のきっかけは、平成24年の地区内アンケート。解決してほしい課題の上位1、2番を「草刈り」「耕作放棄地問題」が占めた。しかし、仕組みづくりで2つの課題に直面し、期間を要した。

最初の課題は、作業費用と利用者負担金とのバランスだった。「隊員も完全ボランティアでは続かない。かといって、作業費用を全て利用者あるいは交付金頼みにすることもできない」。会長の守屋博正さんらは頭を痛めたという。しかし、住民との話し合い、民間の草刈りサービスの費用調査、市職員との相談を繰り返す中で、徐々に作業費用と利用者負担金とのバランスが見えてきた。

隊員の負担が重くなりすぎないために

次の課題は、事業の継続性だった。協議会では、作業用品の確保や、作業保険への加入だけでなく、依頼条件も定めた。この決定にも紆余曲折があったが、最終的に「自力で草刈りできず、頼む親族もいない高齢者」と限定した。理由について、事務局の大平章之さんは「本当に支援が必要な人に対して、隊員の力を発揮したい。休日返上で参加している隊員もいる。その厚意に甘え過ぎないよう、持続的な活動をめざすため」と語る。

今後は、協議会として活動成果をPRして利用者を増やし、地域へ定着させていく予定だ。

地域を元気にする4まちづくり作戦

コミュニティサロン@吉田（よしだ）

ちょっとした気づきから まちづくりの活動へ

使われなくなった消防機庫を再利用

消防機庫と聞くと備品が詰まった少し暗い場所を想像するが、吉田地区にある東消防機庫2階は、床にパネル型のじゅうたんが敷き詰められ、窓辺にかわいい手作り小物が飾り付けられ、明るい雰囲気だ。ここでは、高齢者向けの健康サロンが今年夏から開かれている。主催は吉田地区まちづくり協議会の「ソラマメの会」だ。

1階の車庫部分は受付兼健康診断スペースとして活用。参加者は血圧などを測定し、2階へ。その後約40分間、簡単な体操を行う。住民が指導役となり脳の活性化によい手遊びを取り入れることもある。終了後は、集めた参加費で購入した茶菓子を楽しみ、参加者同士おしゃべりに花を咲かせる。

地区内で広がるサロン活動

事業開始のきっかけは、住民の重見裕子さんと石田信子さんの気づきだ。地区の公民館で開催される健康サロンへの参加が難しくなった高齢者が増えていた。公民館までは約1㎞あり、しかも帰り道は上り坂が続く。一方で、各集落のほぼ中央に位置する場所に使われなくなった消防機庫があり、有効活用できないかと考えた。

笠岡市の許可を得た後、重見さんらは、知人などを介して各集落からスタッフを1～2人ずつ依頼した。運営と同時に事業のPRも必要と考えたからだ。これが功を奏し、参加者も徐々に増加。開催回数も当初の週1回から週3回に拡大し、別会場でも取り組みが始まった。いま「ソラマメの会」はその名の通り、上向きだ。

若者による課題解決の取り組みを紹介

笠岡市婚活支援プロジェクト

北村幸さん（リーダー・写真右）
金尾雅広さん（サブリーダー・写真左）

暮らしやすい笠岡を知ってもらい、笠岡で結婚したくなるような婚活イベントを開催。

婚活イベントは10月29日と、11月5日の2回開催。10月のイベントでのカップル成立率はなんと75％。

「結婚を機に引っ越すまで笠岡は未知の世界。不安もあった。けれど今は特に子育ての面で、公園の多さや支援策など充実した環境に感謝しています」と話すのは、「婚活支援プロジェクト」リーダーの北村幸さん。ぼっけーまち会議のテーマに「婚姻率上昇」があると知り、多くの人がそんな笠岡市で結婚、子育てができたらと、婚活イベントを作るため名乗りを上げた。

おいしい魚、美しい海と島、農のある風景、ご近所との親密な付き合い…。北村さんが感じる笠岡の良さだ。イベントでは、そういった笠岡らしさを盛り込むのがコンセプト。さらに「婚活イベントでありがちな堅苦しさがなく、参加者が『笠岡っていいね』と楽しめるものにしたい」と笑顔を見せる。

10月には、市内の人気飲食店でハロウィン仮装パーティー、11月には飛島を舞台に浜辺でのスポーツや風景を楽しむイベントを開催。人集めに苦労したものの結果は大成功。アットホームな雰囲気、笠岡ならではの料理や名所の数々が多くのカップル成立を後押しした。

プロジェクトメンバーは、北村さんの熱意にひかれて増え続けた。それぞれが得意分野、職業、ネットワークを活かすことで、活動の基盤となったという。ただ、仕事や家庭を持つがゆえの苦労も。「当初はSNSで話し合っていたが、想いや情報を共有するには限界があった。会って顔を見ながら議論する時間を増やすようになってから、雰囲気が変わっていった」とサブリーダーの金尾雅広さんは振り返る。

今後は参加者アンケートの分析や他の婚活イベントのリサーチを行い、参加者のニーズを見極めていくという。また来年度の「笠岡らしい婚活支援」に向けて、熱い作戦会議がはじまるようだ。

ぼっけーまち会議（若者会議）とは？

「婚姻率上昇」「希望する子どもの数が持てる」「転出抑制・転入促進」の３つのテーマについて、若者が自ら考え、企画し、実行するという取り組みです。平成 28 年１月から毎月１回開催しており、これまで延べ約 500 人の若者が参加しました。現在、 約 10 のプロジェクトが進行中で、その一部を各号で紹介します。
ウェブページ：http://www.bokke-machi.com

このロゴが目印！
bokke machi kaigi ぼっけーまち会議